

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月25日現在

機関番号：32688

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21730279

研究課題名（和文） 18世紀ヨーロッパにおけるリネン業盛衰の分析

研究課題名（英文） Rises and Falls of Linen Industries in Eighteenth-Century Europe

研究代表者

竹田 泉（TAKEDA IZUMI）

和光大学・経済経営学部・准教授

研究者番号：20440216

研究成果の概要（和文）：本研究では、アメリカ植民地市場でどのような織物が消費されたのか、またリネンを扱う商人が生産サイドに対してどのような役割を果たしたのか、アイルランド製の麻糸がどのような種類のリネン生産に利用されたのかといった論点に迫ることを通じて、18世紀ランカシャー・リネン業、すなわちイギリス初期綿業は、従来理解されているようなイギリスの工業化の自立的イメージの枠組みというよりも、インドのキャラコ生産だけでなく、アイルランドや大陸ヨーロッパのリネン業の複雑な盛衰過程と連関して展開していたという解釈を示した。

研究成果の概要（英文）： This research considers the following questions: 1) what kinds of textiles were consumed in the British colonial Americas, 2) merchants who dealt in linens played what roles toward the production side, and 3) Irish linen yarns were used in production of what kinds of linens. It can be apprehended that the Lancashire linen Industry (the British embryonic cotton industry) developed in a complicated international linkage of rises and falls of linen industries, such as those of Ireland and of various areas in continental Europe as well as calico industry of India, in stead of understanding it within the conventional framework of independently industrialised Britain.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：リネン、イギリス綿業、アイルランド、アメリカ植民地、工業化、商人、消費、グローバル・ヒストリー

1. 研究開始当初の背景

周知のとおり、イギリスは綿業を中心とし

て、どの国にも先んじて産業革命を経験し、いわゆる「世界の工場」としての地位を確立したという先駆性ゆえに、イギリス綿業研究

は、イギリスのみならず日本においても、経済史研究の分野において常に中心的なテーマであり続けている。しかし、これまで積み重ねられてきたイギリス綿業研究は、紡績機械の登場や工場制への移行などの画期性に焦点を当てたものが大半であり、産業革命以前においてイギリス綿業がいかなる状態にあったのかという点は検討されずにいた。

そこで、綿業の中心地となるランカシャーにおいて、産業革命期以前は、麻を用いたリネン業が、イギリス東インド会社によってイギリスにもたらされたインド製綿布キャラコの代替品を製造していたことに注目し、それを「初期綿業」として位置づけた。リネン業への着目が、産業革命期以前のイギリス綿業の形成過程を明らかにすることにつながるのではないかという着想から本研究の研究課題が設定された。

2. 研究の目的

本研究の出発点は、18世紀におけるランカシャー・リネン業の展開をヨーロッパの様々な地域に存在するリネン業との関連のなかに置き、それらの盛衰の複雑なパターンを解明したいという動機である。イギリスの大西洋地域における経済的覇権の確立とそれを背景に活動する商人に注目することによって、各リネン業地域の勃興／衰退の契機を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 先行研究分析

先行研究分析は主に以下の目的のもと行なった。

①経済史の分野においては、リネン業史研究は、プロト工業化の議論の進化とあいまって積み重ねられてきたが、近年、それらの研究を踏まえて、ヨーロッパ各地におけるリネン業の総合的理解を模索する研究が出ているが、こうした経済史の分野における研究と、異なる時代、地域で製造、消費されてきた織物の特徴を詳細に明らかにしてきた織物史研究とがいかに統合可能かについて考察し、そのなかでの自分の研究の位置づけを明らかにすること。

②近年盛んであるグローバル・ヒストリー研究では、どこが経済的に優位であり劣位であるのかといった経済史の分野で従来とられてきた観点ではなく、それぞれの地域の相互連関が重視されている。この枠組みに、イギリスの工業化の論点がいかに論じていられるかについて分析すること。

(2) 史料調査、分析

国内にない史料は、①史料の内容、所在が分かるものに関しては、大学図書館を通じて取り寄せるか、②史料の内容、所在が分からないものに関しては、海外の史料館での収集を行った。

収集した史料の分析は、①まず、収集した史料が先行研究で使用されているものかどうか、また、使用されている場合はどのような使用のされ方を行っているのかについて調査した。②様々な場所から収集した史料の関連付けを行ない、整理した。③整理した史料の分析を行い、研究を進めた。

4. 研究成果

18世紀のヨーロッパにはあらゆる地域でリネン生産が行われていたが、ランカシャー以外では、ドイツとアイルランドのそれが主な分析対象となった。また、キャラコの原産地インド、および、ヨーロッパ製のリネンやキャラコの消費市場であったアメリカ植民地も視野に入れた。

(1) 消費の視点の導入-イギリス綿業史の遡及

綿業における一連の紡績機の登場、その中でも水力紡績機は、その物理的特徴から歴史上はじめて工場制度を確立させたといわれているが、その綿紡績業における工場制度の成立がイギリスの産業革命の原動力とされ、それを起点として綿業史研究は積み重ねられて来た。産業革命期以前のイギリス綿業史研究がこれまでほとんどないのはこうした古典的な生産サイド中心の産業革命研究の伝統にあるといえよう。

本研究では、そうした産業革命期に登場した機械が「何をつくるか」という視点を導入することによって、イギリス綿業史を産業革命期より前に遡らせる。水力紡績機は、経糸に必要な強度のある綿糸をつくり、その結果イギリスでは、それまでは経糸を麻に頼っていたが、経糸、緯糸ともに綿糸で織られたキャラコが製造されるようになった。イギリスのキャラコの出会ってから産業革命までの約1世紀をイギリスによるインド製キャラコの代替化過程として位置づけると、これまでイギリス綿業史の出発点とされていた水力紡績機の登場は、キャラコの国産化成功、その代替化過程の最終局面として再定置できるのである。その代替化過程がすなわちイギリス綿業の形成期であり、イギリスはその間、素材を麻に頼ってキャラコの代替品を製造

していたのである。

(2) リネン、キャラコの市場としてのアメリカ植民地

アメリカにおける急激な輸出市場の拡大は、当時のイギリスの重商主義政策のもと可能となったものである。18世紀のイギリスは、通商上の特権と植民地帝国とを確保することに傾注し、それとともに大西洋地域との貿易は活発化した。ランカシャー製リネンは、そうした大西洋地域へのイギリスからの重要な輸出品のひとつであった。しかしながら、輸出されたのはイギリス製品ではなかった。大陸ヨーロッパやアジアとの貿易で入手したドイツ製リネンやインド製キャラコ、また、アイルランドで製造されたリネンもイギリス経由で輸出されたのである。イギリスは、大西洋地域における「輸送業者」として、自国製品だけでなく多くの他国製品を運んだ。ロンドンや当時成長を遂げていたブリストルやリヴァプールなどの外港には、各地の織物が集まり再輸出された。インド製キャラコは、イギリスに紹介された後すぐに消費ブーム（「キャラコ熱」）を引き起こしたが、国内の織物製造業者の反対にあいイギリス国内への輸入・使用が制限される一方で、大西洋地域への輸出は続いた。つまり、大西洋地域は、ランカシャー製リネンが他国製のリネンやインド製キャラコと出会い、競争をおこなう市場であったのである。

イギリスがアメリカにおける植民地支配を強化し、大西洋貿易を拡大していた当時は、植民地における白人居住者の衣類や家内装飾品だけでなく、プランテーション労働に借り出されていた黒人奴隷の衣類用の織物需要が急速に拡大した。アメリカ植民地市場における人口の増大は、イギリス製、アイルランド製、ドイツ製のリネンやキャラコの消費を増大させたのである。

(3) ランカシャーとアイルランド

① アイルランドにおける粗質リネン生産

アイルランド・リネン業の展開は、イギリスの重商主義政策によって大きく影響を受けた。アイルランドは、17世紀末から18世紀初めにイギリスによって毛織物業からリネン業への転換を強制させられたわけであるが、アルスターのリネン業先進地域を除くアイルランドにおいては、特にオズナバークやダウラスと呼ばれたドイツ製リネンの模倣製造が奨励された。当該地域の住民には、彼らが比較的容易に製造できる粗質の種類のリネン製造を推奨したほうが効果的であ

るというわけである。しかし、粗質リネン生産を促進することにはもう一つの積極的な理由もあった。消費が富裕層に限定される高級リネンに対して、粗質リネンは、あらゆる階層の人の使用に供するものであった。アイルランド南部の広い地域で自家消費のためにつくられていたリネンは、そのまま、もしくは多少の改良を加えれば、アメリカ植民地において多くの需要が見込める種類のものであった。

こうした粗質部門奨励策打ち出しの背景には、商人の存在があった。市場に近い存在にある彼らは、粗質リネンの重要性を的確に察知していた。それゆえ、粗質リネン業の拡大がアイルランド・リネン業にとって利益であることを伝えるとともに、市場で求める幅、長さ、色に仕上げられなければならないといった商品の規格に関しても指示を出す立場にあった。その規格の参考となったのはドイツ製リネンであり、模倣すべきドイツ製リネンのサンプルを生産サイドに提供したりする役割も果たした。アイルランドのリネン業奨励策は、商人からのフィードバックが大きく反映されていた。当時、アイルランドからは粗悪品が多く海外市場に流出したが、その背景には、こうした情報に生産者が通じていないことが大きな要因であった。その状況に対策を講じる必要性を解いたのも、市場動向に精通する商人であったのである。

② 紡織のアンバランス—イギリスへの麻糸流出

次に、本研究では、アイルランドではどのような麻糸が生産されていたかについて地域別に考察し、それがどのような形でアイルランド国内の織布工程と結びついていたのかを、また、輸出された糸がイギリスの織布工程といかに関連していたのかについて考察した。

18世紀のアイルランド西部においてつくられた多種多様な麻糸は、それぞれに適したリネン生産に用いられるために、州境を超えさらには国境を越えた。アイルランド西部は織布においては後進地域であり、織布で必要とする以上の量の糸が生産されていたこと、または、当地の織布には適さない糸が生産されていたことから、糸は移動したのである。しかしながら、糸の移動のさらなる要因は、イギリスからの猛烈な糸需要の増加にあった。イギリスは、アイルランド製の麻糸を使って、インド製キャラコの模倣品、ドイツ製、アイルランド製のリネンと競合するリネンをつくっていたのである。それを受けて、アイルランドのイギリスへの麻糸輸出は拡大したが、それがアイルランド内の糸不足とい

う結果を引き起こした。アイルランドの織布地域に良質の糸が十分に供給されないまま、アイルランド製麻糸は国外へと流出したのである。アイルランドの織布部門は麻糸の入手問題に直面した。

(4) まとめ

本研究は、近年の産業革命、イギリスの工業化に関する研究を批判的に継承しつつ、インド綿業だけでなく、ヨーロッパ各地のリネン業との連関の中に存在する萌芽期のイギリス綿業(18世紀のランカシャー・リネン業)の姿を確認する作業を行った。

その中で特に明らかとなったのは、ランカシャー・リネン業、すなわちイギリス初期綿業は、従来理解されているようなイギリスの工業化の自立的イメージの枠組みでというよりも、キャラコ原産国インドだけでなく、アイルランドや大陸ヨーロッパのリネン業地域の複雑な盛衰過程と連関して展開したと解釈ができるということである。さらには、ランカシャー製リネンと競合する織物生産者としてだけでなく、ランカシャーへの麻糸生産者としてその連関のなかで成長を模索するアイルランド・リネン業の姿も示した。

また、この連関は、単に製造地域のみを結ぶものでなく、消費市場もそこに連結している。消費への着目は、単なる消費重視論、すなわち、消費か生産か、需要か供給かといった、過去の二項対立的な議論に立ち戻るものではないことは言うまでもない。消費と生産とがいかに結びついているかといった観点から、消費側からのフィードバックによる生産過程の変容、さらには、そのフィードバックを担う両者(生産と消費)を結ぶ商人、また、その背景にある制度、仕組みについてのさらなる議論への発展を視野に入れている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 竹田泉「イギリス綿業形成期の研究視角-国際的連関にみる織物業の盛衰-」『和光経済』、査読なし、44巻3号、2012、23-36ページ。
- ② 竹田泉「18世紀アイルランドにおける麻糸生産-紡織のアンバランスに注目して-」『和光経済』、査読なし、43巻2・3号、2011、33-53ページ。
- ③ Izumi TAKEDA, 'The Irish Coarse Linen Industry and the American Market in the

Eighteenth Century', Journal of International Economic Studies, 査読なし、No.24, 2010, pp.17-29.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹田 泉 (TAKEDA IZUMI)

和光大学・経済経営学部・准教授

研究者番号：20440216